

I 特別評論 晴れと曇りの違い——真中朋久  
II 二十四家による

歴史的・古来の気象語彙を用いた近現代短歌  
現代の新しい気象用語を用いた現代短歌

1月 あたらしくきた冬  
ささゆき  
2月 立春  
春立つ  
3月 春雨  
春日  
4月 穀雨  
かげろふ

5月 八十八夜  
青風  
6月 梅雨  
白雨  
7月 炎天  
驟雨  
8月 炎天  
太郎雲

9月 彼岸  
颯風の眼  
10月 神無月  
霧  
11月 つゆしぐれ  
時雨  
牡丹雪  
12月 風花



特集 気になる天気予報

科学的知識と  
文学的感性の間

現代生活で最も共通して気になることは、天気予報であると言ってもよいでしょう。古来、日本の四季の多様さを反映する豊富な言葉とともに、文芸では天候の微妙な変化を捉えて表現する手法が、広くそして深く用いられて来ました。

ことに短歌においては、俳句の季語と異なり、心情を表わすときに気象語彙が使われるという場面が大きな比重を持っていると思われ

れます。  
そこで現代短歌に於ける天候に関わる言葉を焦点に、特集を組みました。  
歴史的な古来の気象語彙を用いた近現代短歌、新しい気象語彙を用いた現代短歌を一首ずつ、例歌を挙げて解説頂きました。歌人であり気象予報士である真中朋久氏の評論と、併せてお読み頂ければ幸いです。



科学的知識と  
文学的感性の間

## 晴れと曇りの違い

—— ぴりぴりと降る雨 ——

多くの歌人の作品を、晴曇雨雪など、天気についての表現を抜き出して分類しようとしたことがあるのだが、このときに、分類を迷うような作品がいくつあった。例えば佐藤佐太郎の次のような作品である。

取めたる冬野をみつつ行くゆふべひろき曇に天眼移る

佐藤佐太郎(「天眼」)

詞書に「蘇東坡曰、披雲見天眼」とある。曇天のひとつこの青空がのぞき、それが移り行くということであろうか。「ゆふべ」であるから、青空というよりは、朱を帯びた光のさし込むようなところ、あるいは暗雲のなかに薄明をたもつ空が見えたということであるようにも思う。

気象観測における晴曇は、雲量によって定める。雲量は、全天をみわたして、雲におおわれた部分が何割かということであり、十分比であらわす。雲量が十分の一以下ならば「快晴」である。通常、これを雲量1以下と言う。雲量9以上が「曇」、快晴と曇のあいだ、すなわち雲量2～



## 真中朋久

(「塔」・気象予報士)

8が「晴」である。

茫漠と広がる空の何分の一が晴れているとか曇っているかというのは、簡単そうに見えて難しい。難しいから有効数字は一桁であらわし、平均するときを除いて雲量1.5とか2.3とは言わない。人間の視野はそれほど広くないから、全天を見わたそうとすれば、顔をぐるりと廻さなければならず、また比較対象のある地平線近くと、手がかりの無い天頂部では大きさの感覚はかなり違う。全天の一割というのは、その実際は多くの人にとって、案外広い範囲と感じられるだろうと思う。さらにまた、雲は空の一方に寄り集まって分布しているわけではないから、分散した雲が何割なのかを判断することには年季が要る。

駆け出しの頃には先輩の観測と突き合わせながら、一割なのか三割なのか体で覚えようとした。いまの雲量の定義のままでは、機器による計測が困難であり、自動化が進んだ気象観測の世界でも、このあたりはまだ人の関与する部分なのである。しかしながらついでに言えば、近年の気象

予報士の現場では、こういった観測経験のない若い予報士がいても不思議ではない。機器観測された気象条件の分布が、とりあえず手許の画面で確認することができてしまうから、目視観測ができなくてもこなせてしまうことが少なくないのである。

私の仕事について少し書いておくことにする。気象予報士というのは、ひとつの資格であって職業そのものではない。独自の天気予報を発表する気象会社は予報士の資格をもった者を置かなければならないから、予報士はそういう会社に職を求めると、テレビ局などのお天気キャスターも有資格者が優遇されるから、出演機会を求めて予報士を受験するタレントも多い。逆に、たとえば私の場合は、気象会社就職したあとで予報士制度ができたので、必要から資格を取得したものである。予報士の多くは、特定顧客向けの気象予測やコンサルティングに、あるいは裏方として情報伝送やシステムづくりに携わる。顔を出して仕事をしているのはごく一部にすぎない。

よく混同されるのが、「予報官」である。予報官は、国の機関である気象庁の官職名なのであって、テレビやラジオで天気予報を伝えているお天気キャスターを予報官と呼ぶことは誤りである。以前は、予報官OBを気象解説者として招聘する放送局も多かったから、元予報官としての気象解説者が通称予報官として通ってしまったためだろう。

気象庁において予報官となる人は、予報はもろろん観

測・調査などの経験をひととおり積み、同時に地方の気象台や測候所勤務で、さまざまな土地の気候・風土を経験する。しかも交代制勤務で「夜の世界」も見ているから、経験および経験に裏打ちされた知識も豊かであり、スケールの大きい人がしばしばあらわれた。それが気象解説者としての魅力でもあったのである。

しかし、行政のしくみが変わり、コストを重視するようになると、こういう場所も今後どのようになるかはわからない。目視観測をする測候所も廃止・統合され、人のかかわる観測の頻度も減っている。気象観測の自動化が進み、測器の修理もメーカーに頼らざるを得ないようにになると、これまで否応なく接触してきた対象との距離が生じ、経験の質も変化してくるだろう。まして民間会社で働く気象予報士は、よほど意識的にならないと、たんなる技術者として現実の天気から遠ざかってしまう。最近の放送現場で、気象の専門家というより、テンポよく手際よく天気予報を伝えるお天気キャスターや、さらにはエンターテインメント性を前面に出したおしゃべりを求める場面があることに、しばしば躰かされる。

さて、冒頭の引用歌であるが、曇天に「眼」のように晴れたところが移り行くというのであるから、これは全天の一割より小さい雲の隙間であると想像する。観測野帳には「10」と記すことになる。天気としては曇である。ただ、



一首の視点は曇天よりも、部分的に晴れた「天眼」にあるのだから、作品としての天気は「晴」かもしれない。そういうところで天気による単純な分類は頓挫したのであった。

もうひとつ、晴曇のあいだでわかりにくいのは〈薄曇〉だろうか。雲量9以上でも上空の薄曇が多い場合には〈薄曇〉とする。新聞の天気実況欄では〈薄曇〉と〈曇〉をまとめて「曇」としているが、実感としては、薄曇に覆われているのも陽射しがあれば「晴」の印象が強いから、疑問を感じた読者から問い合わせを受けることがある。いっぽう予報のほうでは、薄曇り程度で日がさすことが予想される場合には「晴」を前面に出した表現になることが多い。予報の当否を検証する場合にも、無人の観測所で得られるのは機器測定できる日照時間ぐらいだから、このあたりは元来の晴曇の定義から少々逸脱していることにもなるだろう。

晴曇は多くの人にとって、気分、あるいは情緒の問題である。もちろんそれは大きな問題ではあるが、雨や雪が降るかどうか、ということのほうがもう少し切実だろう。ごく弱くても雨が降ってれば天気は雨である。降っているものがあれば、それによって天気を定義する。空は晴れていても曇っていても、降っているものが優先されるから、たとえば「日照雨」は「雨」となるのだが、これまた佐太郎の「天眼」と同様に、文学的な天気の種類は困難なので

ように、言葉によって補わなければならない。

降水確率というの、使われているわりには理解されない指標である。明後日までの予報で発表される降水確率は6時間毎のそれぞれの時間帯に1ミリ以上の雨が降るかどうかの確率である。

天気予報はあくまでも予報だから、外れる可能性をゼロにすることは困難である。「ずばり」晴れとか雨とか言うのはいさぎよいけれども、今後のシナリオがいくつか考えられるような場合に、その一つのみを詳細に述べることは得策ではない。得策でないというのは、外れたときに予報者が責任を問われるということではない。利用者側も外れるとしたらどういう外れ方をするのか、競馬の予想になぞらえていえば、本命の他に対抗馬や大穴になる可能性を押しさえておけば、小回りも利くというものである。

そういうことを雨の場合について、簡単に数値で示そうというのが降水確率のだけれども、このあたりも、まだしばらくは言葉による橋渡しが必要だろうか。

京都市内のしぐれは弱い、日本海沿岸部、あるいは丹波山地ではそうではない。夕立を思わせるような強い雨であったりする。北陸・山陰方面では「弁当忘れても傘忘れるな」という諺があるが、これは雨の強さをも語っているのである。弱い雨を前提に「しぐれ」と言っても、イメー

あった。

私は十年ほど、京都の天気予報にかかわったので京都の例について述べるが、冬の京都は雨が多い。道因法師の、「晴れ曇時雨は定めなき物をふりはてぬるはわが身なりけり」(新古今集のごとく、一方に青空が見えながらしぐれの雨が通りすぎて行くような変わりやすい天気である。関東地方で冬といえば、本州の脊梁山脈で雪や雨を落としつくした空つ風の青空が特徴的であるのに対して、京都は北西に位置する丹波山地の標高がそれほど高くないから、北西の季節風によって雪や雨を降らせる雲が流れ込む。風が北寄りになればなおさら若狭湾からの距離が短いから、日本の水分を含んだ雲が流れ込みやすくなる。

京都市内で「しぐれ」といえば、どちらかといえば、ごく弱い雨が通り過ぎて行くような場合が多い。降水確率で対象としているのは、「1ミリ以上」のように量的にあらわれる雨であるから、雨が降ることは確実にわかっている。量的にわずかであり、1ミリを越える可能性が低ければ降水確率の数字は小さい。そしてまた、予報の当否は量的にあらわれる雨を対象に検証するから、天気予報の表現としては、雨を前面に出さず、「曇時々晴れ所により一時雨」のように付加文として表現されることになる。そして「所により」以下の部分は、テレビの天気予報で画面に出る天気マークには反映されない。だから、「晴れ間はありますが、時おり一時的に小雨がぱらつくでしょう」という

いと実感として理解しにくい。ごく弱いしぐれの雨を、若狭湾周辺の人は「しぐれる」と言わず、「びりびり降る」などと言うが、なるほど日がさしながら細かい雨粒がびりびり降るものであるだろうか。

そういうことを、強く意識しなくても予報士の仕事は右から左に流すことができるかもしれない。たとえば「全国」のように広い範囲を対象とするときには、個別の事情は捨象しなければならぬから、「日本海側を中心にしぐれるでしょう」で強いしぐれも弱いしぐれもまとめて語ることができる。もちろん広域を対象とする場合には、別種の観点をしっかり押さえないならぬのだが、特定顧客へ提供する予測情報や、ローカル放送局の天気予報では、同じ「しぐれ」でも地域によって雨の降りかたに大きな違いがあるというようなことを頭に入れて語らなければ、山一つ越えたところの利用者に信頼されない。極端な話をすれば、地元の言葉で語る必要を感じることもあるのだが、こちら側に、実際の空を見る経験が不足していたりすると、話も通じないのである。

座して得られる観測値は質的にも量的にも格段に増えた。予報表現についても、C、D、G等の技術が日々進みつつある。しかしながら、現地の実際の天気への想像力や、予想を伝えるために言葉の力で補わなければならないところは、いっこうに減らず、むしろ増えているようにも思われるのである。